

Blessed Night- Mr.Moonlight

弦月

「は～。それにしてもよく晴れてるわよねー」

彼女は青く澄み渡った夏の空に向かって手を翳しながら、そう呟いた。少女というには成熟していて、女性と呼ぶにはまだ幼い風体。彼女は隣に立っていた男に向かって再び同じ言葉を繰り返す。

「ね、ホントよく晴れてるわね。大丈夫？」

青年と呼ぶには大人びて中年と呼ぶには若すぎるその男は、ややあって気だるそうに頷き返したただだった。白い砂浜をサンダルで踏みならしながら、彼女は波打ち際へと一歩また一歩近づいていく。気まぐれな波がその無防備な足を太股まで一気に濡らす。『きゃはっ☆』と、少し困ったように笑いながら履いていたサンダルを脱ぎ捨て、ジーパンの裾をめくりあげるその光景に男が呆れた様子で声をかけた。

「……ツキエ。私たちは戯れに来たわけではないだろう？」

「わーかってるわよそんなこと。けど、ちょっとくらい遊んだっていいじゃない。めったにこんなところ来ないし、ね？」

そう言って、サンダルを手に引っかけずんずんと波に向かっていく。不意にその動きが止まったかと思えば、何の前触れもなく彼女はくると百八十度、男の方を振り返った。

「……ねえ。それよりやっぱ、そのカッコなんか知らない？」

「？どういうことだ？」

その端正な眉をひそめながら、男が首を傾げる。質問の意図がまるで分からない、といった風だ。

「いや、分かってる。どーしよーもないのは充分分かってるけどさ。やっぱ何ていうの？見るほうが暑っ苦しいっていうかねえ～」

「じゃあ、見なければいい」

そう言う男の格好は、この真夏の砂浜、というシチュエーションを全身で否定していた。真冬のシベリアを思わせる、やたら分厚くてその上足元まで丈の伸びたロングコートにブーツ、帽子、おまけに手袋まで完全装備。さらに、何故か揃いも揃ってそれが全部黒一色。唯一夏らしいアイテムといえばサングラスくらいのものだが、それだってこの状況では彼の黒さ加減を引き立たせる役割しか果たしていない。

対する彼女も海、という場所にこそそぐわないかもしれないが、——海といえば水着、という認識を一般の見解とするならば——とはいえど、キャミソールにローライズのジーンズ、というその服装はけして非常識ではないだろう。少なくとも、夏服としては間違っていない。

「気にするな。別に着ている自分自身は暑くない」

あくまで真剣な表情で、男はそう言い切った。

応えて直後、む～、と拗ねたように口をとがらせる彼女の様子は、もはやただの子供にしか見えない。

「分かってるわよ。あたしだってもちろん、『あんたと波打ち際で健康的に追いかけっこ～』みたいなのを期待してたわけじゃないわ、ええしてませんとも。けどさあ、せえーっかく海まで来たのになーんにもしない、っていうのはさすがにねえ～」

肩をすくめ、深くため息をついて自嘲的に笑う。しかし、次の瞬間何かに気付いたかのようにその顔があっ、と驚いた。

「そっか、そーよね。考えてみたらあなたこの太陽光線だけじゃなくて海の波もあまり得意じゃなかったわよね、確か」

呟くツキエに、男はまたもや首をわずかに縦に動かすだけだった。

——砂浜にいるのは今、この二人っきりだった。それほど小さな場所ではない、時季的に海水浴客がそこそこ集まってもよさそうなものだが——やはり人の気配がしないのは、あの事件、のせいなのか、とツキエは思う。

「もったいないわね～。シゴトじゃなきゃ絶対泳いで遊んで行くのにー。ねえ、蒼夜（そうや）？」

呼びかけられて、男——蒼夜は少しだけ不機嫌そうに目を細めると眼鏡のフレームを押し上げた。

「そろそろ、私にも聞かせてくれてもよいのではないかな？ その、奇怪な事件の話とやらを」

「そーね。じゃ、あらすじだけかいつまんで。私もざっと聞いただけなんだけど——ほら、あそこ。あの岬の上に灯台が見えるでしょ？」

そう言ってツキエが指差したのは、断崖絶壁の崖とその上にちんまりと佇む白い建物だった。

「あの灯台の中で人が死んだんですって。つい、数週間前くらいの話かな？」

「殺人か？」

簡潔に問う蒼夜に、彼女は曖昧に答えを濁した。

「さあ、分かんない。『さっちゃん』の話では、ただの自殺として処理されたいわよ」

「……ツキエ。それでは話にならないではないか」

そう言って呆れた表情をする男に、ツキエは得意げな様子で腰に手を当て人差し指を立てながら、

「こら、他人の話はちゃんと最後まで聞くものよ？——その死んでた男だけど、警察にマークされていたらしいって話なの」

「どういうことだ？」

問われて、口元に手を当てて詳細を思い出すかのように斜め上へ視線を動かすツキエ。

「何かね、とある強盗事件の主犯者の容疑をかけられていたらしいわよ。ほら、確か一ヶ月くらい前に都内の銀行で三千万強奪された、って事件があったでしょ？拳銃持った三人組が——ってヤツ」

蒼夜が納得したかのように軽く頷いてみせる。

「思い出した？警察の調べで、どうやら今回そこの灯台で死んでた男がその犯人の一味じゃないか、ってところまで突き止められたらしいわ。でもまあ、捕まる前に死んじゃったみたい。警察からしてみれば傍迷惑な話よね」

そこまで言って、ツキエは視線を元に戻して相手の様子を窺った。眼鏡越しに蒼夜の鋭い双眸が光る。

「なるほど？例えばその強盗事件をともに計画した仲間が真実が発覚するのを恐れて殺した、とでも言うのか？」

「もしくは何らかの事情で仲間割れを起こしたか、ね」

視線だけで頷き合う二人。——先に得意げな笑みをして見せたのは、一体どちらだったか。

「可能性は充分あるわ。というより、まず間違いなくそうみたい。現に強盗犯は三人組で——そのうちの別の一人がついこの間原因不明の自動車事故で死んでるらしいから」

「……なるほど。確かに偶然は二度も続きはしないだろうな」

「そういうこと。この自殺騒動が実は事件だっていう可能性は、けして見逃せたものじゃないわ。ね、どう思う？近年稀に見る難事件だと思わない？」

爛々と妖しく瞳を輝かせながら、ツキエが蒼夜に問いかける。

「さあ、どうかな。どちらにしても、ここまでわざわざ出向いて来たのだ。収穫なしでは困る」

「まあ、それもそーね」

少し、考える様子を見せて。今まで冷めていた蒼夜の声が、次の瞬間わずかに熱を帯びていた。

「もし、その話が本当とするなら。強盗に殺人……無期は免れないな」

「そーね、久々の`大物、よ。だから張り切っていこうじゃない」

ツキエの快活とした返答を聞いて、蒼夜も無表情なその顔に、判りづらい形でほんの少しだけ不敵な笑みを寄せる。

「そうだな。小物を撮るのはもういい加減飽きた。そろそろフラストレーションが溜まっていたところだ——」

「どうやら納得してもらえたみたいね？それじゃあ——」

そしてツキエが満足そうに、年に合わない幼い笑顔で何かを言いかけたかと思うと——

「早速、遊びましょ～かねっ」

——言うが早いか、言葉とともに再度海へ駆け寄ろうとするツキエ。……がしかし、それよりも蒼夜がその後ろ襟を捕まえる方が早かった。

「ちょっと一、何するのよ～？」

首根っこを掴まれた猫よろしく、じたばたと暴れるツキエに蒼夜は今にも頭を抱えだしそんな呆れ返った顔で、

「それはこちらの台詞だ、何でそうなる？遊んでいる暇などないと何度言わせれば気が済むのか——」

「判ってるわよ、そんなこと充分に～」

「判っているのなら、ほかに優先すべきことがあるだろう？事件の舞台がその灯台だというのなら、せめてそこを実際に見て回るくらいのことにはしなければなるまい。この際だから言っておくが、あまり長居はしたくない。やはりこのような場所とは根本的に相性が悪いようだし——」言いかけて、ツキエのまるで聞き分けのない子供のような拗ねた顔を目にした蒼夜は、少し言葉を途切れさせると付け加えるように言った。

「……まあ、ツキエの言いたい事も判らないではないが。たまには羽を伸ばしたい、息抜きも必要だ、と。しかし、何もそれがよりによって海である必要性は特に感じられない」

「ぶーぶー、何よお。せっかくの海なのよ、夏なのよ？テンションあがらない方がおかしいってゆーのっ」

「お前はいつでもどこでも無意味にはしゃぎ回っているではないか。別に今に始まったことではないだろう」

「何よー。もうっ、例えば、私の水着姿が見たい、とか思ったりなんかしちゃったりはしないワケ！？」

少しの間、考えるような間があって。紡がれた声は、百パーセント純粹に本気だった。

「……むしろ見れなくて良かったと思っている」

「~~~~~っ！！？」

声にならない怒りを爆発させて、ツキエは蒼夜に襲いかかった。

容赦なく、力一杯、あらゆる手段を持ってして。ばしばし、という擬音語だと可愛し過ぎるから、ここはどかっばきっばすっごきっ——くらいにしておこう。

そのすべての攻撃をやれやれ、と呆れ果てながら受け流すところから察してみるに、どうやらこの二人にとってはありふれた光景らしいけれど。

「——気は済んだか？済んだら、とっととやるべきことを済ませよう」

「ばかっ。あんたが血吐いて倒れるくらいはしてくれないと気は済まないわよ！」

「そうか、残念ながらその要求には応えられそうにはない。諦めてくれ」

「.....ふ〜んだ、覚えてなさいよっ。そのうち絶対痛い目にあわせてあげるんだからっ！！」

「ああ、期待しないで待ってるよ」

まるでどこかのありきたりな悪役とヒーローのやりとりを思わせる台詞。けれどもそれでとりあえず、何とか一応の決着はみたらしい。

ややあって、ツキエが仏頂面でサンダルを履き直し、その場から歩き出した。仕方がないから折れてあげるわ、とでも言いたげな様子で。

「言っとくけど、あたし水着だって自信あるんだから」

振り向きもせず、背中越しに呟かれた一言に、蒼夜はただわずかに口元を吊り上げてその後にくだけだった。

「つかーれーたー」

うっそうとした森を抜けて、坂道を登ること約三十分。

「自業自得だろう。最初から海になど向かわずにこちらへ向かっていたらこんな無駄な体力を使うこともなかった」

息も絶え絶えに汗を拭うツキエとはまるで対照的に、蒼夜は極めて冷静な声でそう言った。息一つ上げることもなく汗一つかくことなく、完全に涼しげな表情で。

「なによー、偉そうに！あたしはこう見えてデリケートなのっ！あんたと一緒にしないでよねっ！？」

「……デリケートが野蛮な、という意味だとは初めて知った」

そういう蒼夜は、どこまで本気か冗談か分からない表情で。けれどそれではツキエの神経を逆なでするばかりだ。

「あーもう、恨めしい〜〜っ！！」

——二人は、といえば今、例の灯台の前までやってきていた。砂浜から見上げていただだけでは分からなかったが、こうして間近まで来るとなかなか大きい。

「それにしても、ひどい荒れ様だな」

「ええ。今はもう使われてないみたい。元々空き家だったところに犯人たちが隠れ家として目をつけて、住み着いたんじゃないかって話よ」

蒼夜の呟きにツキエが答えた。

「さ、じゃ中に入るわよ」

そして彼女はためらいもせず、その入り口に手をかける。しかし、それは中から鍵がかかっているのかどれだけ押しても引いても開かない。

「蒼夜、なんとかしなさい」

さも当然、といったようにツキエが男に命令する。彼は判りやすく嫌そうな顔をして見せるが、それも一瞬だけだった。

「手段は問わないか？」

「うん、問わない」

速答するツキエ。直後、ぱりんと軽快にガラスの割れる音。蒼夜は迷わず入り口の扉のガラス窓を叩き割り、そこから手を入れて鍵を外す。

「あ〜あ、やっちゃった」

「…………おい」

まるで傍観者のような、楽しげな声。けれど彼女の言葉と行動は矛盾する。

「お邪魔しま〜す」

そんな、友人の家でも訪ねるかのような気軽さで。彼女は鍵の開いた扉に手をかけ、真っ先に中へと入っていく。入ってまず二人を出迎えたのは、上へと果てしなく続くらせん階段だった。足を踏み入れた瞬間、ひんやりとした空気が肌を潤した。真夏の太陽に灼かれ、火照った身体にちょうどいい。階段を上るには薄暗く足元が不安で——手探りで電灯のスイッチを入れるが、明かりがつくことはなかった。

「やだ。ここ電気つかないの？」

「ところどころに蠟燭を立てた跡が残っている。恐らく、ここを隠れ家にしていたその強盗犯とやらは灯りをそれに頼っていたのだろう」

「そうか、さすがに空き家に電気がついてたら怪しまれちゃうかもしれないしね」

言って、仕方なくツキエは石造りのざらざらした壁に手を触れ、それを頼りに階段を昇りはじ

める。頂上まで上り詰めると、そこに現れたのは一枚の壁——いや、重厚な鉄の扉だった。

「開くかな？」

半信半疑でツキエが手をかけると、ぎしぎしと耳障りな音を立てながらも今度はあっさりと開く。

中には、六畳ほどの部屋が広がっていた。元々は灯台の職務に当たっていた者が寝泊りしていたのだろうが、今となっては見る影もない。南と北、それぞれ二箇所窓があるもののよろい戸が下ろされていて、やはり中は薄暗い。

「ふ〜ん。案外普通ね」

「何を期待していたんだ？」

呆れ顔で聞く蒼夜に、ツキエは『別に〜』と面白くなさげに返す。……彼女のことだから血塗られた壁とか床とか血文字とかを期待していたのかもしれない。

「ここで例の人物は死んでいたのか？」

「ええ、そうみたい。死因は一酸化炭素中毒による窒息死——早い話が、練炭自殺したっていうことね」

ツキエのよく言えば簡潔、悪く言えば不親切な説明に、それでも蒼夜は瞬時に情報を理解したらしかった。

「疑問点が二つほどある。ひとつ、警察に追われて追いつめられた犯人が取るにとしては随分と悠長な死に方じゃないか？そしてもう一つ、いくら自殺としてはポピュラーな方法といえど、それだけで自殺だと判断するのはあまりに拙速すぎる。なにか他に自殺だと認めざるを得ないような重篤な理由があったのではないか？」

「ご名答、その通りよ。答えは単純かつ明快ね。——遺書が残されていたんですって」

「遺書？」

予想もしていなかったのか、思わぬ単語に蒼夜は不審気な表情を見せる。

「そう。内容は『世間様にご迷惑をおかけしましたー、警察に追われてもう逃げるのにも疲れたんで死にますー』みたいな感じだったかな。あ、もちろんちゃんと直筆だったらしいわよ。筆跡鑑定も既に済んでるって」

そんな彼の様子を見ながら、ツキエはさくさくと説明を続けていく。

「ね、動かしがたい証拠でしょ？直筆の遺書——それも内容に一切不審な点もない。となればいくら状況が不自然とはいえ、警察も自殺だと判断せざるを得なかったってこと」

「……いや、やはりこれは殺人だ」

すると今まで無言で部屋を見回っていた蒼夜が、静かな声で呟いた。

「——へえ？どうしてそう言えるの？」

それを聞いて、ツキエが面白くなって来た、とでも言わんばかりの表情で問いかける。蒼夜は黙ってツキエを一瞥し、部屋の入り口——今さっき自分たちが入ってきた扉へと近づいた。

「扉に外側から目張りをした痕跡が残っている」

「どういうこと？」

「だから、隙間があってはこの部屋に致死量に足る一酸化炭素を充満させることが難しかったということだろう。必然的に、このように扉のわずかな隙間なども目張りしてふさぐ必要があった——」

「それはでも、ある意味当然でしょ？だからといって自殺じゃないとは言い切れな——」

言いかけて、蒼夜の立つ扉の側に近寄って。ツキエは、そこで初めて彼の言いたいことに気付いたようだった。

「なるほど。確かに、部屋の中で死んでた人間には外から目張りをすることはできないわね」
部屋の扉は、外から隙間を塞がれていた。いや、正確に言えばガムテープか何かでふさがれた跡だけが残っている。テープの破片は一枚足りとも建物の中に残ってないし、警察がはがして持ち去った、というわけでもなさそうだし、したがってそれが意味することとは——。

「——つまり、第三者が中に被害者を閉じ込めて、練炭を仕掛けて、外側から扉をふさいだってことね。テープを持ち去ったのはやりすぎだったけど——ううん、どっちみち外側からふさいでたってことがばれたら殺人事件確定だもの。はがして持ち去るしかなかったのか」

「まあ、そういうことだ。これを見逃すなんて警察もまだまだだな」

「ええそうね、今度会ったらちゃんと働けて言っとくわ」

答えたツキエの表情は、やはりどこか楽しげだった。

「それにしても……日が翳ってくるとやっぱり暗くって見にくいわね——」

そして彼女は部屋の窓に近付いて手をかけようとするが、

「さすがに開けるのはちょっとまずいか」

はたとその手を止めると、代わりに近くにあったランプに、同じく部屋にあったマッチで火を点す。部屋の中に一筋、ほのかな明かりが灯った。

——部屋には他にあと二つ、部屋の主が使っていたらしいガラス製のランプが残されていた。それは中に蠟燭を立てて火を点ける、ややクラシックな形式のもので——。

……その時、ふとツキエの動きが止まった。そのうちの一つの底に、どろどろに溶けたまま冷えて固まったらしい蠟燭の残骸が残っている。あとは全部キレイに使われているのに——？

「……待って。これ、もしかしてわざとなのかしら？」

呟いて、ツキエの瞳が何か面白いものでも見つけたかのような、好奇心旺盛な子供の色で満たされる。

「はは～ん、そーゆーことか。ちょっとした宝探し気分ね～」

そして彼女はしばらく、その白い艶々としたある種奇妙なオブジェに興味津々で見入っていた。

「ツキエ。聞いている情報はそれくらいか？」

そんな彼女のひとりで行くくると動き回る小動物めいた様子を、部屋の隅でじっと眺めていた蒼夜が物静かな、それでも良く通る声で問いかける。

「ん、そーね。大体今喋っちゃったことくらいかな」

ジーパンから携帯電話を取り出して、その内容に見入るツキエ。

「あ。ちょっと待って、あと一点だけまだ話してないことがあるわ。役に立つかどうかは分からないけど——」

「構わない。聞かせてくれ」

「灯台の——この部屋だけど、警察が指紋を調べたら幾つか奇妙なことが分かったんだって。被害者の——死んでいた男のものの他に、他の第三者の左手の指紋ばかりが見つかってる、って」
ケータイのディスプレイに視線を落としながら、ツキエは何がなんだか、といったような感じで首を捻る。

「どういうこと？ 犯人が左利きってことかしら」

「なるほど。それで何となく見当がついた気がする。犯人が被害者に『遺書』を書かせたトリックとやらが」

「蒼夜？」

顔を上げてツキエが呼びかけるのにあわせて、彼はただでさえ無気力そうに見えるその目を、さらに退屈そうに歪ませた。

「——さあ、とつとこんな事件終わらせてやるべきことを済ませて帰るとしよう。問題は、どうやって犯人を捕まえるか、だが——」

ただそれだけが唯一の関心事、だとも言いたげに彼はそう言って独り考え込む。

「どういうこと？ね—蒼夜、一人で分かってないでちゃんと説明してよ—？」

「説明ならば後でいくらでもしてやる。その前にお前も考えろ。どうすれば犯人を簡単に捕まえられるか——」

蒼夜のその投げやりな態度に、機嫌を損ねたのか少し口を尖らせるツキエ。けれど唐突にその顔が整って真面目なものになったかと思えば、

「それにしても今更だけど、殺したい相手を都合よくこの部屋に閉じ込めておくなんていう、そんな便利な方法あるのかしら？」

思い出したかのように、いや実際思い出したんだろう、何の気なしにツキエはそんな疑問を口にする。

「そんなことは問題ではないだろう。犯人は、恐らく——いや、かなり高い確率で被害者とともに銀行を襲ったその強盗犯の一人だ。仲間が眠っている際にすべてやってしまえばいい」

「それもそっか。強盗犯の一味、ね……」

独り言のように呟いて、視線を落とすツキエ。ややあって、その円い瞳が蒼夜を見上げて告げてくる。

「ねえ、蒼夜。強盗犯とかその他どんなのでもいいけど、犯罪者が『仲間割れ』する時って何かしら理由があるわよね？」

「それはもちろんあるのではないか？例えば、急に心変わりして警察に自首するとか言い出したとか——あるいは強盗犯ならば分け前を巡って何かしらの衝突があった、とか」

答えながらも、彼は怪訝そうに眉をひそめる。

「しかし、それがどうかしたのか？犯罪の動機など、私にはどうでもいいことだ。お前も大して興味はないだろう？」

「ちょっと、思ってね—。もしこの犯人たちが何かしらの理由でトラブルを起こしてたとしたら、被害者は少しくらい自分の身に危機感を覚えても良さそうなものじゃない？それが眠ってる間に殺されちゃうだなんて、まるで危機感ゼロだわ」

「それも確かにそうだな」

ツキエの言葉を受けて、蒼夜も納得がいったのか、さめた目に少しでも感情という色が映りこむ。

「被害者には、けして『自分が殺されない』という確信があったということか？」

「というよりは実際は殺されちゃってるから慢心、だけどね」

しばらく沈黙。黙って思案している蒼夜の顔は、彫像のように物静かだ。

「……ツキエの話も一理あるな。それならばその理由は——無条件に信頼していたか相手が反抗などするはずはないとたかを括っていたのか、肉体的に被害者が優位に立っていたのか。あるいは強盗犯、という状況に当てはめてみるならば——」

「——ほら、あれじゃない？よくあるお金の隠し場所をその人一人しか知らない、みたいな。それなら『自分を殺したら隠し場所は一生涯なくなるぞー』みたいなノリで、殺されるはずはないっていう慢心が起こってもおかしくはないわ」

頷いて、その言葉に同意を示す。けれどその直後、彼の顔色は何ともいえないような難しい表情が映り込む。

「確かに。だがツキエ、それが分かったところで事件を解決させることには何ひとつ役に立たな

「気がするのだが？」

「そんなことないわよ。さっきの、あのローソクのアレあったでしょ？あれと照らし合わせて考えると——」

ツキエの、勝ち誇ったかのような得意満面な笑顔。それに吊られたかの如く、蒼夜も口の端をほんの少し歪める。

「なるほど。犯人を吊る餌くらいには役に立つかもしれない、ということか」

「そーゆーこと。……動くのは……うん、やっぱり日が暮れてからの方がいろいろと都合がいいわよね——」

一人で呟いて、考えて、納得して。よしよし、と頷いた彼女のその目が——一瞬鋭く光る。

「決めたっ！は〜い、それじゃそれまで海に出て遊んで——」

「却下」

ツキエが声にして、蒼夜がすぱっとそう切り捨てるまでに要した時間、わずかコンマ3秒。

「にゃー！！？」

叫んで振り返るツキエに、蒼夜は呆れた、というよりももはやさめた色の無い眼差しを。

「少なくとも、私は今は外に出て体力を消耗したくない。よってここで夜までじっとしていることを提案する。——ああ、もちろんツキエが一人で行ってくる分には全然問題ないぞ。好きにすればいい」

「なにそれ、ひどーい！一人で遊んでも面白くないでしょっ」

「なら、諦めろ。運が悪かったな。冬の夜ならまだ考えなかったこともなかったぞ」

「ばか、それじゃあたしが泳げないでしょー！？」

——結局、また海岸へと降りてこの灯台まで坂をあがってくるのは辛い、ということもあってツキエは海水浴を諦めることになった。

「……いいもん。また今度絶対遊びに来るから……あうあう」

まるでいじけたかのように——というか実際いじけているのだけど——そう独り言を呟くと、ツキエは窓をほんの少しだけ開いて、外の様子を窺った。今まで暗闇に目が慣れていたせいか、一筋紛れ込む太陽の光のその余りのまぶしさに思わず目を背ける。地平線にもうすぐ沈みゆくようにしている夕陽の色が、攻撃的なまでに紅く網膜に灼きついて、いつまでも離れようとはしなかった。

暗い森、木の陰、不気味な崖のシルエット——どこからか潮風に混ざって聞こえてくる波の音。数時間後、完全に日が暮れてしまうとそこには灯りとなりうるものは何ひとつ存在しなかった。空は曇り、今夜は月も少しばかり不機嫌にその間に虚ろい気味で。そんな夜の中で、『彼』はいつも通りに動き始めた。

ここには今、静かな夜と闇しか存在しない。探し物をするには絶好の夜だ、と言わんばかりに。『彼』は笑って——いつも通りに坂を登りだした。いつも通りの時間に、いつも通りのルートで森を抜けて。向かった先は頂上にあるその白い建物。……けれどしかし、頂上に辿り着くその手前でひとつだけいつも通りではないことに気が付く。

——灯りが、点いている。無人のはずの灯台に。誰も立ち入るはずのない——自分たち以外入れるはずのない、その建物の中には小さいが確かに明かりが灯っていた。慌てて駆け寄ると、入り口の扉は壊されている。

戸惑ったが、中に入っていくことにする。そして、長い長い螺旋階段を上り詰めてやっと辿り着いた、その先。扉の隙間から、線を描くかのようにわずかに光が零れていた。中から人の気配がするようないないような——分からない。

不審に思い、扉にゆっくりと左手をかけた——その刹那。

「いらっしゃい。遅かったわね、随分待ったわよ？」

仄暗い部屋の中に、二つの人影が見えた。一人は少女と女の間くらい、まだ年若い娘。そしてその隣にはぱっと見ただけでは年齢も相好も良く分からない、全身に黒を纏った男が一人。見ただけでは二人の関係性は分かりそうにもなかった。

「こんばんは、お邪魔させてもらってるわ」

そのうち、女の方が知り合いかと思うほどの気安さで『男』に声をかける。『男』は答えなかった。警戒した表情で二人と距離を取る。

「ああ、そーか。自己紹介がまだだったわね。あたしは緋野月笑（ひの・つきえ）——で、隣に居るのが蒼夜。あ、けどあなたは名乗らなくてもいいわよ？あたしたち、あなたの正体はとっくに分かってるんだから」

「ツキエ。悠長にそんな話をしている場合か。じきに夜が明ける。それまでにすべて“こと”を終わらせてしまわねばならぬだろう？」

するとそれまで黙って彼女のやることを見ていた黒服の男の方が、そう咎めた。言っていることの意味は分からない、だがしかし。二人から異様な雰囲気を感じ取ったのか、本能的に危険を察知したのか。じりじりと後ずさりする男。

「逃がしはしない」

けれど、男が部屋を出て行く寸前に蒼夜が指を鳴らした——それと同時に、彼の背後で重い鉄の扉がひとりでに閉まる。

「おっお前ら、一体何なんだよっ！？」

そこで初めて恐怖に負けたのか、男はそう叫んだ。答えたのは、蒼夜の冷たく凍った、絶対零度の声。

「——知る必要はない。何故なら、陽が昇る頃にはお前はこの夜のすべての出来事を忘れる運命にあるのだから」

「ま、そーゆーことね。そろそろ年貢の納め時ってヤツよ。あなた、いい加減諦めて捕まりなさい」

ツキエの言葉に、男の表情が一瞬で陰しくなった。

「……お前ら、どこまで知ってる？」

「どこまでも、よ。ここで起こったこと、行われたこと——全部知ってるわ。多分あなた以上にね」

「・・・・・・・・」

男が沈黙する。当然といえば当然だ。これ以上の発言は自分自身の不利にしかなり得ない。ツキエは喜々とした声で、煩わしい説明は嫌うかのように、軽快かつ明快に言葉を口にさせる。

「あなた、人を殺したわね。とりあえずここで一人——そしておそらくは事故に見せかけてもう一人。そのもう一方の事案に関しては何ともいえないけど、この間警察が自殺として処理した例の事件は立派な殺人事件よ。あなたが殺ったのよね？」

男はそれに、沈黙を持って回答とするのみだ。ツキエは構わず先を続ける。まるで最初から、男の反論など聞く余地もない、とでもいった様子で。

「被害者に遺書を書かせる、とかいうのも簡単なトリックだったのね。あなたは被害者にそれを書かせたのよ。直接、まごうことなく本当に」

立ちすくむ男に向かって、ツキエが笑いかける。けれどそれは、今までの人なつこい笑顔とはまた別物だった。

例えばそれは——狙った獲物はけして逃がさない、獰猛な獣のような鋭い眼差しと、幼い子供が好奇心から動物を追いかけ回すかのような無邪気で真剣な瞳の色と。そういったようなものが同居もしくは混在したかのような、あたたかみを感じさせない……それでいて今、この状況を楽しんでいる、不道德な笑み。

「普通に考えたらそんなこと誰もしてくれやしないわよね？でもそれが、自分の遺書じゃなかったとしたらどう？」

ほんの少しだけ間をおいて、彼女は男に一步近付いた。その動きに合わせて、男が一步たじろぐ。その反応を愉しむかのように、彼女はもう一步、歩みを寄せる。

「——そう、話は単純。あなたは被害者に遺書を代筆させたのよ。自分の代わりに辞世の句を書いて欲しい、って。普通に考えたらちょっとそれって、あやしい行動よね。けどあなたにはそう言える、不自然じゃない理由があったってこと——」

そこで一拍呼吸を置いて、彼女は薄紅色の唇をすっと持ち上げて微笑んだ。今度は妖艶で大人びた、ぞっとするほど美しい微笑みをみせる。

「ねえ。その腕の傷、痛そうね？」

ツキエに問われ、男はさらに一步後退し、その腕を隠すように後ろへ引いた。——その腕——包帯を巻きつけられた、その右腕を。

「どこで怪我したのかは知らないけど——あなたは今現在利き腕である右手が使えない状況にある。それを利用して、被害者に遺書を書かせたのね。『警察に追いつめられて生きていく自信がないから自殺する——手の使えない自分の代わりに遺書を書いて欲しい』——とおそらくは、こう言った感じで説得して」

男は黙って答えなかった。身じろぎ一つせずその言葉を聞く。それはあたかも、捕食者ににらまれた被食者のようだった。動かない、というよりはまるで動けない、とでも言ったような感じで——。男の目には目の前で饒舌に話を続ける女の姿と、その傍らに無言で佇み、自分を射抜くような視線でこの場に繋ぎとめる黒い男が映る。

「部屋に左手の指紋しか残ってなかった、っていうから。まさかと思ったけど右手を怪我して、まったく使えない状況にあったわけね。被害者が人が良かったっていうか考えが足りなかった、っていうのは当然あるでしょうけど——でもまさか、怪我人に殺される、とは思わなかったんでしょうね」

ツキエは一方的に話を楽しみ、そしてそれ以上に相手を追いつめて遊ぶ、その行為そのものを愉しんでいた。そう、だからこそ彼女の顔からは喜色が消えることはなく、むしろ一層色濃く増していくばかりだ。

「そしてそういえばもう一つ、被害者があなたの反乱を予期できなかった理由があるみたいね。あなたたちが奪った三千万——結局隠し場所が分からないままなんじゃない？」

「ああ、そうだ。その金はいつがどこかの貸し金庫に預けたといってそのままだ。が、それもあやしいもんだ」

ツキエの声に、男が噎れた喉から搾り出すような必死さで、久々に言葉を口にする。

「灯台下暗し、って言葉あるわよね。気がつかなかった？それ、この建物の中に隠されてるわよ？」

「嘘だ！この灯台の中はもう何回も捜した、けど見つからなかった！だから俺は外に埋めたのかと思って森の中を……！」

「それはそれは、無駄な努力だったわね。ちゃんと、この建物の中——この部屋の中にあるわよ。ねえ、蒼夜？」

ツキエが呼びかけると、彼は無言で彼女に近くにあったライターを投げ渡した。そしてそのまま彼女は壁際に歩いていくと、ランプの中に残った蠟燭の残骸をその火で炙った。炎に溶かされ、瞬間に輪郭を失っていく蠟燭の欠片、それは白く淡く融けてどろりと液体になって流れてランプの底を満たし——。

「……ほら、見つかった」

そしてツキエの指がその溶けた蠟燭の残骸の中から、ひとつのあるものを掴み上げた。そしてそれを、一部始終を困惑した目で見つめていた男の足元にひょいっと放り投げる。

「ね？『灯台』下暗し、とはよく言ったものよね～。部屋のランプの中で、これ一箇所だけローソクの残骸が残ってるから不自然だなんて気になってたんだけど。試してないから何とも言えないけれど、間違いなく貸し金庫の鍵だと思うわよ。あなたの相方が隠した、ね」

そこまで言って、彼女は冷ややかな視線で相手を見遣った。

「とは言っても、見つかったももう今更どうしようもないけどね。だってあなた、今ここで捕まるんだもん」

ツキエの声に、冷や汗を流しながらも男は再び後ろを振り向いた。そして背後の扉へと駆け寄ろうとしたその際に。

「——蒼夜っ！！」

彼女が呼ぶよりも先に、彼は動いていた。いつの間にか数メートルはあったはずの距離を一気に詰め、目にもとまらぬ素早さで男を捕獲、のち拘束する。

「チェックメイトよ。さ、おとなしく捕まりなさい。逃げてもな一んにも得すること無いんだから」

そう言うツキエの表情は、まるで追いかけて楽しむ子供のそれと変わらない。

かつかつ、と軽快な足音を立ててツキエが男に近寄る。雲間からほんの少し覗いた月が、その童女にも似た無邪気な笑顔を照らし出した。

「ねえ、そういえば不思議に思わなかった？どうしてあたしたちがこうして、あなたを罠にかけるように待ち受けていたと思う？本当なら、警察にだって説明した方が早いに決まってるでしょ？どーせあたしたちは一般人、犯人を捕まえる権利なんてないんだから」

そして男の目の前に立った彼女は、姿勢を低くして情けなく地面に座り込んだ男の顎に片手を触れ、無理やり上へと引き起こす。

「だから、ね。こうしてあたしたちがここで張っていたことにはちゃんと意味があるの。——必要なのよ、あなたみたいな犯罪者の血が」

「お前ら……一体、何者なんだ……!？」

「あたしたち？そーね、最後に種明かしくらいしておこっか。どーせ忘れちゃうから意味ないんだけどね——」

男にかけたツキエの手が、その指先が男の首筋を辿った。白い爪が、つう、とその薄皮を傷つけてその上を血が一筋流れて落ちる。赤く濡らした指を口許に当てて笑いながら男の耳元に囁くかのように、

「……吸血鬼って、知ってる？」

それは悪夢のように、優しく、残酷で、そして甘美な声色だった。

「いい？今日びのヴァンパイアっていうのは犯罪者の血を吸りながら生きてるのよ、涙ぐましいでしょー？」

明るく茶化すような口調。それでもその言葉は本気だと、紛れもない真実だと。男は頭の何処かで——理屈じゃなく本能で悟っていたようだった。

「ば、ば……っ、化け物っ!!」

「失敬ね～、とりあえずあたしは普通の人間よ？化け物はこっちの方」

言われて、ツキエはむう、と見るからに不機嫌そうに顔を怒らせて蒼夜を指差した。

「今は便利な時代でね？吸血鬼も昼間から活動できるんだ。あ、そもそも何で吸血鬼が昼間動けないかって言うと日光に弱い、っていうか紫外線に弱くって。先天的に紫外線に対する免疫がほとんどない、そういう生物なわけね？」

そう言ってひょいっと手を伸ばすと、ツキエは蒼夜のサングラスをさっと取り上げた。

「だから、こーやってコートと眼鏡で紫外線を遮断してやれば昼間も活動できる、っていうワケ」
こう見えてこの眼鏡、現代科学の粋を集めて作られた最高の一品よ？UVをほぼ百パーセントカットする優れたシロモノなんだから」

——だがしかし、男はもはや彼女の説明は聞いていなかった。いや、音声としては認識していたかもしれない。けれどもそれはどちらかというと、聞くという行為に特化して理解することを放棄した傍聴人にしか過ぎなかった。

「安心して、別に命まで奪りはしないから。軽く血を吸われただけじゃ吸血鬼になんてならないし、せいぜい貧血起こして今日一日の記憶失うくらいのものだし。だから、じっと大人しくしてほんのちょっと我慢してくれば、これ以上ひどい目には遭わさないわよ？」

「……ツキエ。下がっている」

「なによ、蒼夜。言われなくてもちゃんと吸わせてあげるわよ。ホント、せっかちなんだ——」
言いかけた彼女の台詞は、最後まで続かなかった。

「——っ……!？」

数発の乾いた銃声。数拍遅れて、ツキエが後ろによろめいて壁に背をつけるかのような形で地面に崩れる。

そして——心身ともに追いつめられた男の手には、いつの間にか信じ難いことに凶器が一丁、握られていた。

「平気か、ツキエ」

この状況に慌てることもなく、まったく平静と変わらぬ冷静さで蒼夜はそう声にする。その言葉には相手を案ずるとか労わるといったような雰囲気はまるでなく、一応形式的に聞いてみた、という感じでしかなかった。そして、一方問われたツキエは、ということ——。

「ふっ…ふふ、あははは…っ」

——笑っていた。俯いたその顔に、しなだれた髪の空き間に見える口許に、正体不明の妖しい笑みが浮かぶ。

「う〜効いたあ〜。いろいろ痛い目には、遭ってきたけど、さすがに銃で撃たれたのは、初めてね——」

彼女の腹部——脇腹の辺りには、明らかに致命傷と思われる傷——銃創が穿たれていた。けれど、当初こそ血がとめどなく大量に溢れ出ていたものの何の応急処置も施していないのに早くもそれは止まりつつあった。そして完全に傷口から出血が止まるのと同時に、蒼ざめていたツキエの顔にも徐々に血の気が戻っていく——。

「前言撤回。蒼夜、全力でやっちゃいなさい。さすがにこれは、いくらあたしでもぶち切れたわ」

「お前はいつだってぶち切れてるじゃないか」

「——うるさいっ！！」

その叫び声に、蒼夜がつと真剣に、かつ自ら望んで男の前に立ちはだかる。

「言われずとも、最初からそのつもりだ」

「ば……ば、化け物——！！」

再びそう声にした男の視線は、今度もツキエの方を向いていた。

——今度は否定する気にはなれなかった。自分の血で濡れた手で髪をばさりと掻き上げ、ああ確かにと自嘲する。それはどこか他人事のように、冷め切った冷たい微笑だった。

「銃刀法違反に殺人未遂、か。——望むところだ。獲物が罪を重ねれば重ねるほど、抵抗すればするほど私の好きに捌ってよいと——そういう契約を交わしているのぞな」

冷めていくツキエの表情とは対照的に、蒼夜の声は徐々に、それでも 確実に熱くなっていく。

「ああ、だからといって大人しく捕まれ、というほど私は優しくはないぞ。もっと存分にもがき、苦しみ、暴れ抵抗するがいい。その方がこちらとしても殺りがいいというものだ」

「うっわ、趣味悪。相っ変わらずのサディストね〜」

ツキエのその厭味が聞こえたか、聞こえないか。ともかく、蒼夜は今夜、今日、ここまでで一番最高に機嫌の良さそうな表情をして——。

その影が、闇に溶けて消えたか、と思う間もなく。

耳によく馴染む、聞き落としそうなほどささやかな口笛の音色が——始まりであり、そして同時に終わりの合図。聞き取れた頃には、何もかも終わっていただろう。

結論だけを言ってしまうえばそれは勝負、と呼べるほど対等なものではなく、かといって一方的な搾取と言ってしまうにはあまりに洗練されすぎている光景だった。

そう。例えば野生に生きる獣が自らの生命を営むために必要とする `狩り、が、ちょうどこんな感覚ではなかっただろうか——？

その間に銃声は何発か鳴ったかもしれない。男が我を忘れて叫び、襲い掛かって来ようとしたかもしれない。けれどそれはすべて、判り切ったかのように無意味。

`標的、は `狩人、に抗うことを許されず、 `勝者、は `敗者、を思うが俚に蹂躪する。弱肉強食の論理。即ち、被食者は捕食者に、絶対的に敵わないということ——。

絶望と恐怖に震える男を片腕で吊るし上げ——その喉元に、深く深く牙が食い込んだ。瞬間、気を失い弛緩する男の身体。

少し、空間が静寂を孕むとどさり、と重苦しい音がして被食者の体が床に落ちた——いや、落とされた。紅く血に塗れた口元をぐい、と手の甲で拭い取りながら、

「不味い。やはり男の血は美味くないな。六十点くらいか」

呟いた声は、闇と同化しているかのような——あるいは闇そのものが声を出しているかのような静けさだった。そこから、物音ひとつしない沈黙が幾らか続く。

「……ツキエ。生きてるか？」

そのしんとした空気を破って、彼は振り向きもせずそう尋ねる。

今度はどこかのんびりと、間の伸びた声。それがすべて終わったことを示していた。

「残念ながら、生きてるわよ。……大丈夫よ、弾丸は貫通してたし——急所は外してるし」

先程までと同じく地面に膝をついて座り込んだ格好で、ツキエは答えた。何でもないかのように、少しだけ疲れたかのような声で。

「あーあ。この服、お気に入りだったんだけどなー。落ちるかなー？」

血で真っ赤に染まった服を目にして、がくりと肩を落とすツキエ。その様子に、何とも言えない複雑そうな表情で蒼夜は深く息を吐く。

「油断をしているからそういう目に遭うのだ、ツキエ。これに懲りたら少しは大人しくすることだ。いくら私の影響で治癒力が向上しているとはいえ——お前は元は人間なのだから、無茶の効かない身体だということを早いところ理解してくれ」

「あーもう、わかってるってばっ」

ツキエは煩わしそうに不機嫌な顔で言い返した。それでも、彼のその咎めるかのような強い視線は変わらない。

「本当に解っているのか？いいか、そうでなくてもそうやって人間離れした力に慣れてばかりいると……いずれ本当に人からかけ離れ、こちらの世界に近付いてしまうと——」

「——うるさいっ！わかってるわよ、もうっ！！」

蒼夜の声に被さるかのようなタイミングで——その言葉を遮るかのような形で、ツキエはもうほとんど叫び返すくらい強い口調で彼の言葉を止めた。

無言で俯いて力無くうなだれたその身体が、深く目を閉じてはあ、とため息をつく。それは反省しているというよりはどちらかという後悔しているかのようにみえた。

「確かに、油断はしてたけどさ。相手が強盗犯だってこと忘れてたし、そういえば銀行襲ったのも拳銃だったし——」

「包帯、というのも怪我をしているからというわけではなく相手を油断させ、なおかつ銃を隠すカモフラージュだったようだな」

冷静に分析するかのように蒼夜が答えた。その態度に、ツキエがきつと視線を尖らせて彼に向かってわめく。

「ってゆーか蒼夜、アイツが武器隠し持ってたことくらい最初っから判ってたんじゃないの！？」

返されたのは、悪びれた様子もなくただただ簡潔に諭すかのような一言。

「だから止めただろう。下がっている、と」

「それじゃ分かんないわよーっ！！」

叫んで、再びツキエが一方向的に蒼夜に襲いかかる。地面にへたり込んだまま、その丸められた拳がばしばしと彼の足の方を打ちつけた。意味もなく、飼い主にじゃれつく猫を思い起こさせる。

「……気は済んだか？済んだら帰るぞ」

そして、また今度も適当にあしらって。蒼夜がツキエを立ち上がらせようとその手を取ろうとした——まさに、その瞬間。静寂に満たされた緩やかな時間を打ち破って、硝子の碎け散る荒々しい音が鳴り響いた。

『——！？』

二人が同時に、音のした方角を振り返る。見ると、部屋にいくつか置かれているランプの一つが割れ、床に散乱していた。——先程男が乱射した弾丸の一つでも当たったのだろうか——？思う間もなく、今度はそこから床に零れた蠟の脂を伝うように一気に炎が燃え広がる。

「ツキエ、逃げるぞ」

蒼夜が動じた様子もなくそう言うが、

「うん……——っ！？」

立ち上がりようとした彼女の足には力が入らず、また膝から地面に倒れてしまう。それを見ると蒼夜は何も言わず、ツキエの身体を抱え上げた。

「ちょ、ちょっと……！？」

抗議の声もまるで無視して、彼はそのまま——まず気絶した男に駆け寄ると、その体を片手で掴み上げて窓から乱暴に外へと放り投げた。そして今度は踵を返し、反対側の窓へ向かって跳ねる。

無駄のない動きでその枠に足をかけると、一拍、眼下に見える夜の闇にそのまま身を躍らせた。

「ちょっと——！？」

ツキエの視界には、黒い空と、暗い世界と、わずかばかりの月光が映り込む。下は見ない、見れない、見たくない！断崖絶壁、暗い海——彼女は思わず目を瞑り、身を縮こまらせた。漆黒の外套が闇に翻る。

厚い布が風になびくばさばさ、という音が聞こえたか、と思ったら——直後。

騒々しい水音と同時に、視覚と聴覚と呼吸、全てが一瞬で奪われる。暗闇、無音、口内を刺激する塩辛い水の味、そして身体が沈んで浮き上がるような感覚、そこで初めてツキエはそれが海の中だということを理解した。

しかし、かといって理解したところで身体はその急展開についていけない。呼吸が出来ず、苦しい息のままだ必死に喘いで、もがくことしか出来ない。酸欠で遠くなりかけた意識の中、身体が引き寄せられるような感触があったかと思えばそのままずっと海中から引き上げられて——。——砂浜に両手足をついて何とか身体を支えながら、ツキエは肩を上下させて時折咳き込みながらも、荒い呼吸を整えようと試みる。その視界に映る相方は、格好こそずぶ濡れに情けなく砂浜に座り込んでいたが、それでも冷静なその顔はそのままだった。濡れた服を心配する余裕すらあるらしく、ため息混じりにコートを脱ぎ捨てる。

「……ばっか、おかげであやうく死ぬトコだったじゃないっ！！」

「いいではないか。それに念願の海水浴ができたぞ」

「ちっとも良くないわよー！」

怒鳴りながらツキエは彼からそのコートを奪い取ると、それを下に敷いてぐったりと地面に倒れ伏せた。

「第一、どーゆーつもりなわけ？そりゃー緊急事態だったっていうのは認めるけど、あの犯人大丈夫？」

「心配するな。あの灯台の周囲は森で囲まれている。どんなに運が悪くても骨折程度で済むだろう」

事も無げに、さらりと蒼夜は言い切った。

「まあ、そりゃ中で焼け死ぬよりは確実にましだろうけど……」

「それにこちらとしてもあの火事でいつ人が駆けつけてくるとも限らない。人が来る前に逃げてしまわないと」

言いながら、蒼夜はその場から立ち上がった。一刻も早くこの場から逃れたい、と無言で相手に問う。

「そういえばだいじょぶかな？結構ひどく燃えてたけど」

「古いとは言え建物は石造りだ。あれ以上は燃え広がらないだろう」

納得したのか、ツキエは素直に頷いてわずかに表情を緩ませた。

「ん、そうだね。それじゃ後はいつものように報告だけ済ませて、っと」

そしてツキエは携帯を取り出して、どこかへ電話をかける。相手呼び出すコール音が何回か響いたか、と思えば。

「あ、『さっちゃん』？こんばんは、今夜もいい夜ね」

ツキエは身体の向きをかえると仰向けになって、空を仰ぎながら受話器に向かって話し始めた。

「あのね、例の事件だけどたった今片付いたから。うん、ちゃんと犯人も生きてるよ。……殺す訳無いじゃん、『さっちゃん』に怒られちゃうもの」

くすり、と微笑んで目を閉じるその仕様に、少し安堵の色が混ざる。

「それでね、後のことよろしく頼みたいんだ。——うん、ありがとまた電話するね」

それじゃ、と最後に言い置いて彼女は通話を終える。

「——朝までには何とかしてくれるって。てなわけで、あたしたちはそろそろずらかろーか」

そして携帯をしまって、起き上がった彼女の身体は——何故か立ち上がることはなく、座り込んだ姿勢のままで動きを止めた。

「ちょっと待って。やっぱり、もう少しだけのんびりしていこう？」

「……あと少しだけだぞ」

ツキエのすっかりくつろいだかのような言葉と笑みに、蒼夜はやや呆れた感じの顔色を見せるが、結局はそれに付き合う形でその隣に腰を落ち着けた。それを満足げに見届けると、彼女は再び仰向けに寝転んでそのまま真っ直ぐ空を見つめる。

——暗い。昼の青さが信じられないくらいに曇り、澱み、それは星一つ照らさない。辛うじて月の影がぼんやりと見えていたが、それも今にも雲の合間に消えてしまいそうなほど儚く頼りない光景だった。

朝を迎えるにつれ、行き場を無くしてあせていく月の色。けれど、そんな胡乱な姿でさえ見惚れるほどに美しい、とツキエは思う——。

「明るくなる前に消えなくちゃ。あたしたちみたいのには、やっぱり真夏の海は眩しすぎるね」言葉とともに、自嘲的な笑みが漏れる。疲れたように深くため息をついて、ツキエは瞳を閉じた。その瞬間訪れる瞼の奥の暗闇は、今いるこの砂浜の空よりも、もっと深く——そして暗い。

「——ねえ……人間が灯りを必要とするのって、やっぱ暗闇への恐怖があるんだろうね——本能的に」

「何をおかしなことを。ツキエ、お前だってその人間ではないか」

揶揄する様子もまるで無く、完全に真面目な声音で蒼夜が返す。それに応えて一瞬不意に頷きそうになったツキエの首筋が——ぴたりと止まって、次に横へと流された。

「ううん、やっぱあたしは違うよ。この身体のことこそそうだけど——やっぱり、暗闇に恐怖を覚えなくなったら人間として間違ってるって思うもの」

そしてうっすらと開いたその虚ろな眼差しが、空を薙いだ。そこにあるのは灯り一つ無い、完全に闇に閉ざされた夜のいう名の同胞だった。

「あたしは怖いと思うどころか安らぎさえ感じてる。この星一つ無い空に。ああ、あたしの居場所はここなんだな——って」

「それを言うなら、太陽に慣れた私だって根本的に間違っているではないか」

「あはは、そーだね、お互い間違ってるね」

それを聞いてツキエが静かに笑い声を立てた。——気のせいかもしれないけど、弱々しくて無理をしている響きを伴っているようにも、聞こえる。

「……けど、やはり違うな」

「何が？」

「さっきお前が言った、人が灯りを必要とするのは——という話だ。暗闇が怖いから灯りを必要とする、それ以上に無意識のうちに明るいものに惹かれるのだろう。そうでなければ、人間があれだけ無闇に夜を飾り立てる理由が説明できない気がする」

自分を見下ろす相手のその瞳が、いつになく真剣で真っ直ぐだということに気がついて、ツキエは素直に驚いた。

「珍しいわね、こーゆー話に付き合ってくれるの。いつもは『そんなのくだらない』って言って無視するじゃない」

そこで蒼夜は彼女から視線を外し、後ろを振り向いた。背中越しに響いた声は相変わらず無愛想だけれども、気のせいかな、それでも普段よりは冷たくもないようにも思われて。

「なんとなく、思っただけだ。それは私にとってのツキエ、お前の存在に似て非なるものなのではないか、と」

ツキエが黙って、蒼夜の影を見上げた。瞳でそれ一体どういう意味？と問いかけてくる。横目でそれを見た彼は何も言わず、唇をほんの僅かに横へと引き寄せた。多分、ツキエにも判らないくらいわずかな動きで。

「——さあ、もうこんな話は止めて帰るぞ。そろそろ傷も塞がっただろう？……ああ、それから早く眼鏡とコートを返してくれ」

「はいはい、分かったわよ——」

ツキエはその後もしばらく無言でぼんやりとしていたが、最後に深く大きいため息をついて微かに笑うとそれに応えて起き上がった。まず敷いていたコートを持ち上げ、付いた砂を払う。

そして次に、服のポケットやその周辺を探る——その表情が、思いがけなく戸惑った。

「……………って……あれ？あれれ？」

「ツキエ？」

その間の抜けた声に不吉な予感でもしたのか、蒼夜が素早い動きで振り返る。

『てへっ』と眩しくウィンクして見せた悪魔の微笑みに、嫌な予感はいよいよ現実味を帯びていく。

「なんか、どっかに落としちゃったみたい。さっき海に落ちた時かなー？」

「……何だって？」

——一瞬で。蒼夜の顔が引きつった。青白い、を乗り越してもう既に顔色はなかった。

「——もうすぐ陽が昇る。あれがないと私は——っ……！？」

言いかけて、彼はそのまま浜に崩れ落ちる。こう言っては何だが、中々見事な芸人転び。

「あっれ～？紫外線の許容濃度超えちゃった？」

見下ろすツキエの笑顔は、非の打ち所の無いほど明るく、晴れ晴れと邪気がない。その何処にも悪びれる様子も心配する気配もみえないのはある意味奇跡だ。どうしようか、少しだけ逡巡する様子を見せること数秒。——彼女の中では結論が出たようだ。

「ん～、いい気味だしもう少し放っておこうかな」

「ツキエ、恨むぞ……」

絞り出すかのようにか細く発せられた声は、瞬く間に波の音に打ち消される。さらにその上に被さるような形で、ツキエのの一てんきな笑い声があたりに響いた。

——そんな二人をまるで無視して、仕事熱心な太陽は今日も自分の役割を果たし始める。また新しい一日の始まりを迎えて世界に色が灯り始めるその中で。形の無いいびつな月の影だけが、二人をひっそりと見下ろしながら笑っていた。

《END》